

吉備国際大学研究紀要  
(人文・社会科学系)  
第25号, 79-92, 2015

## 明治初期における「通俗教育」の用例について —渡邊治訳『三英双美政海之情波』における「通俗教育」の検討—

倉知 典弘

### Consideration of “Tuuzoku-kyouiku” in Translated Novel “Saneisoubi Seikai no Jouha”

Norihiro Kurachi

#### Abstract

In Meiji-era, the word “Tuuzoku-kyouiku” was used in some articles and books. The meaning of this word has been thought to explain the meaning of education simply or explain the new things ,like science and so on, simply. But the discussion of “Tuuzoku-Kyoiku” has not been progressed for long time,because of luck of news resources.

In this paper, “Tuuzoku-Kyouiku” in translated novel “Saneisoubi Seikai no Jouha”, that is new resource, is examined. “Saneisoubi Seikai no Jouha” is translated novel which is known as “Endymion” by Benjamin Disraeli. Disraeli wrote many novels based on his experience. For “Endymion” is also consisted of peace of his experiences, we can know what the words means through comparing the words with the historical incidents.

In this novel, two pattern of usage of “Tuuzoku-Kyoiku” ware found. First one was literal translation of secular education. Latter one was title of section that the translator, Osmu Watanabe , added. Both patterns ware used to explain secular education. This meaning of “Tuuzoku-Kyouiku” has been unknown. The usage as secular education was very peculiar, comparing other usage of “Tuuzoku-Kyouiku”

**Key words** : Benjamin Disraeli ,secular education ,tuuzoku-kyouiku

**キーワード** : ディズレイリ, 通俗教育, 渡邊治

## 1. 本論の意図

通俗教育という言葉の由来及び意味するところは社会教育研究が本格的に開始された頃より検討が続けられており、その理解が深められてきた。近年では松田武雄が教育会の実践などの分析を通じてその意味を明らかにしようと試みており<sup>1)</sup>、また佐藤三三はなぜ社会教育と命名されたのかという関心から「社会教育」を検討しているが、その過程で「通俗教育」の用語について検討を行っている<sup>2)</sup>。しかし、それらの研究に用いられる史料は、長い研究の蓄積もあり、かなり絞られるようになってきており、その解釈をめぐる議論が進められる一方で、新たな史料の発掘は地域の教育実践以外の部分では限られてきている。

本論では、管見の限りにおいて、今までの研究では取り上げられることのなかった渡邊治訳『三英双美 政海之情波』<sup>3)</sup>（以下、『政海之情波』と示し、この著作からの引用については巻号及び頁数のみを示すこととする）における「通俗教育」の用いられ方について検討を行う。『政海之情波』は、渡邊治によって翻訳された政治小説であり、原著はディズレイリの“*Endymion*”<sup>4)</sup>である。この『政海之情波』の検討を行うことの意義は、この著作が翻訳の形態をとっていることに由来するが、「通俗教育」という言葉が日本以外の社会におけるどのような事象に対応するものとして理解されているかを明らかにすることが可能であるという点である。この検討を通じて、「通俗教育」という言葉の理解を深めることにつながると考えられる。

本論では、まず原著者及び翻訳者について先行研究を元に概観した後、『政海之情波』の分析を行う。その際に、まず翻訳形態などについて検討し、『政海之情波』に現れた「教育」と「通俗教育」の用い方を検討する。最後に『政海之情波』に現れた「通俗教育」がどのような位置を占めるのかを主要な通俗教育論と比較で検討し、その独自性をあきらかにする。

## 2. 著者及び翻訳者について

### (1) 原著者ディズレイリについて

ディズレイリ (Benjamin Disraeli, 1804~1881) は、イギリスの政治家、小説家である。ディズレイリの研究としては、様々な伝記的なものがいくつか存在しており<sup>5)</sup>、また政治家としてのディズレイリに関する研究はヴィクトリア時代のイギリスに関わる研究<sup>6)</sup>などにおいて多く取り上げられている。その一方で、小説家としてのディズレイリについての研究はそれほど多くない。また、ディズレイリがどのような教育思想を持っていたのかについても研究は存在していない。本論では、ディズレイリ自身の思想や功績を検討することを主目的とするわけではないので、本節においては、簡単な経歴についての紹介を先行研究に基づいて行い、小説家としての評価について若干付言するのみにとどめる。

ディズレイリは、イタリア系のユダヤ人であったが、幼い頃親がユダヤ教から離籍したことに伴い、ユダヤ教からイギリス国教会へと宗派を変えている。

彼はまず弁護士事務所などで働いていたが、その仕事もすぐにやめ、出版業を手伝ったり、評論活動などを行っていた。1826年に処女作である“*Vivian Grey*”を匿名で執筆・出版するもその内容やその登場人物のあり方をめぐって非難を浴び、その非難を避けるために諸国を飛び回る生活をしばらく続ける。

彼が政治家を目指すようになったのは、1832年第一次選挙法改正の頃である。しかし、彼が議員となるまでに4回の落選を経験し、ようやく議員となれたのは1837年のことであった。ディズレイリの初期の議員活動について際立ったものはないが、数少ないチャーチスト運動を支援した議員であったとされ、保守党の中では急進的な立場に立つ存在として知られている。ただし、彼がチャーチスト運動を支援しているかのように振舞ったのは、チャーチスト運動の主義主張に同意していたからというよりは、改革派の人間までがチャーチスト運動の弾圧に賛成していたことを批判したのであ

る。

1841年には保守党が政権を握り、ピールが首相となる。それにあわせてディズレイリは入閣を懇願するも、ピールに冷たくあしらわれる。その後、ピールに対する批判を徐々に強めるのだが、その結果保守党はピール派と保守党に分裂することとなる。この分裂した保守党において、ディズレイリは枢要な地位を占めるようになっていく。その後、ダービー卿の内閣で閣僚職を務めるなど、その影響力を高めていった。

1867年当時の首相であったダービー伯が病気で辞表を提出すると、ビクトリア女王に組閣を命じられ、少数与党のまま組閣。しかし、1868年の総選挙で保守党が敗れたことに伴い、首相を辞任。その後自由党のグラッドストーンが首相について、さまざまな改革を実施する。だが、1873年のアイルランドの大学の創設をめぐる法案が否決されたことを受けて、グラッドストーンが総辞職をする。そして、1874年の総選挙において保守党が絶対多数の政府を樹立すると1880年までにわたる政権を樹立する。ディズレイリは、工場法の改正に踏み切り、労働時間の短縮及び最低就労年齢の引き上げを行うなど、労働組合に歩み寄った政策を展開する。その一方で、帝国主義的な政策の展開することになる。しかし、1876年に発生した不況と帝国主義的政策により各地で軍事力を行使しなければならなくなった状況から、徐々に支持を失っていく。そして、1880年の総選挙において保守党は敗れ、そのまま辞任している。以降、1876年にビーコンスフィールドという爵位を得ていたディズレイリは貴族院に出る以外は、地方に引籠もりながら生活をしてきたが、1881年に逝去する。

ディズレイリの著作としては、“Vivian Grey”(1826)<sup>7</sup>、“Popanilla”(1828)、“The Young Duke”(1831)、“Contarini Fleming”(1832)、“Alroy”(1833)、“The Infernal Marriage”(1834)、“Ixion in Heaven”(1834)、“The Rise of Iskander”(1834)、“Henrietta Temple”(1837)、“Venetia”(1837)、“The Tragedy of Count Alarcos”(1840)、“Coningsby”(1844)、“Sybil, or, two nations”(1845)、

“Tancred”(1847)、“Lothair”(1870)、“Endymion”(1880)、“Falconet”(1881)がある。

ここで注目しておきたいのが、ディズレイリの小説の執筆に対する態度である。当時の時代背景なども反映しているが、ディズレイリは小説の中に政権批判などを織り込んでいる。たとえば、“Coningsby”においては、「公爵の孫コニングズビの政治生活や社交界生活に依つて、政治の方針や政党の主義や、宗教や、教育や、王権の不振や、貴族社会の萎縮の原因」<sup>8</sup>を批評している。なお、この作品は自身の所属する政党の党員に向けてかかれたものであるが、これが小説として出版されたことが「政治小説の流行を招致」した。また、続編に当たる“Sybil, or, two nations”では、いまや国は二つの階層ではなく、往来のない二つの国民に分断されているとした上で、シビルというチャーチストを主人公にし、チャーチスト運動の様子を小説として描いている。ここでは、労働者の生活実態などが細かく記述されている。その傾向は、“Endymion”にも当てはまる。主要な登場人物こそ、違う名前が当てられているが、所々で現れる事件は、ディズレイリが生きた当時の英国社会（政治）で重大と考えられるものであり、当時の首相などの名前はそのまま用いられているケースも多い。小向日は、この“Endymion”を「偶発的な自伝的小説」と述べたが、それは公的な部分についてはディズレイリが自分が生きた時代の様子を描きながら、私的な部分については個人の感情を含めて書いたからに他ならない。

## (2) 近代日本におけるディズレイリの受容

ディズレイリの名前は、古くから知られていたようである。例えば、岩倉使節団の報告でもある『米欧回覧実記』にはイギリスの首相の一人としてディズレイリの名前が挙げられている<sup>9</sup>。しかし、ディズレイリの名前が日本に広まるきっかけとなったものは、『西国立志編』を通じてであろう。この書の中で、ディズレイリは「勉強学習の力によりて、盛名を世に得たる人」<sup>10</sup>として、作家として「弁論に長ぜる士」として成功した人

物として紹介されている。この著は、士族を主な対象として翻訳され、実際に多くの読者を獲得しており、ディズレイリの名前を知ることになったことであろう。なお、ディズレイリの著作のうち、“Coningsby”が関直彦訳『政党余談 春鶯囀』(1884)として、“Henrietta Temple”が牛山鶴堂訳『双鸞春話』(1887)として、“Contarini Fleming”が、福地源一郎、塚原靖訳『昆太利物語』(1890)として翻訳されている。

このようにディズレイリの著作が翻訳されたのはなぜであろうか。その点に関して『政党余談 春鶯囀』の序文において訳者である関が述べていることは重要である。つまり、国会の開設に先立ち、政策論議を行ってきたが、それがために体調を壊した自分がこの著作を読むことにより、初心を思い返すことができ、政治の世界に飛び込む力を取り戻したということである。ここにディズレイリの著作が日本において政治社会における「立身出世」を奮い立たせる役割を果たしたことが示されている。また、『政党余談 春鶯囀』は日本でも政治小説が流行するきっかけとなった<sup>11</sup>とされている。『政海之情波』もまた政治小説であり、この流行に乗ったのではないかと考えられる。

### (3) 翻訳者渡邊治について

渡邊治に関する先行研究は、十分に積み重ねられているわけではない。ここでは、坂井達郎<sup>12</sup>及び都倉武之<sup>13</sup>による研究を元に、渡邊治の人物像をみておく。

1) 渡邊治の略歴 渡邊治(1864~1893)は、水戸藩出身である。水戸藩では茨城中学校において、事実上の慶応義塾の分校とされた中津市学校で学んだ松木直己から英学の指導を受けた。中学校を卒業した後、1881(明治14)年に茨城師範学校長の紹介により、慶応義塾に入学する。

1882(明治15)年に慶応義塾を卒業すると同時に、時事新報社に入社し、記者となる。なお、同時期には、『社会教育論』を著した山名次郎が時事新報社で記者を務めており、山名の著作である『偉人秘話』にもわず

かに記述が見られる。山名によれば、渡邊は「非常に政治に熱心な人」であり、新聞においては自分の意見を述べるのがかなわないので、時事新報社内の若手記者と『独立』という名の雑誌を発行しようと試み、福沢に手厳しく叱られた<sup>14</sup>ということである。その後、渡邊らは当時編集を担っていた伊藤欽亮にもつかかかろうようになる。福沢は中上川彦次郎宛書簡の中で以下のように当時の状況を述べている。

「時事新報にて伊藤がひとり編集をつかさどりおり候ところ、渡邊、石河らが少々不平にて、新聞の権力は編集に集まり、自分らは勞して功なきがごとし。ついてはその権を分かつべし云々のことを申し出候につき、何とか致さずては、相成らざる義と存じ候。その際、穏やかならざる言葉を吐きたるよし、薄々承り候につき、さようなことを申せば新聞局中一人も入用なし。諭吉がただ一人にて請け合うべし。役にも立たぬ少年は一切不用といわぬばかりに話をしかけて、まずことは治まり候ありさまなり。」<sup>15</sup>

このような渡邊の政治志向や不平不満の発露が影響したため、福沢は渡邊を事実上解雇することとなる。中上川への書簡には以下のように記されている。

「渡邊治氏こと、近来次第に政治に熱し、方々奔走して新聞紙のことも手に付かぬと申す有様にて、第一は社の用を欠き、第二は政治社外独立の時事新報にてその社員が政治の何々党と与するなど、評判せられても面白からず。かたがたもって、今度改めて、毎日社に出勤することを断り、社説でも出来て、紙上にのぼすべきものあらば採用すべし。兎に角に本社にては渡邊を当てにせずと申し渡し候」<sup>16</sup>

その後、都新聞に入り、主筆を務め、また大阪毎日新聞において主筆を務めた後、大阪毎日新聞の社長となり、1890(明治23)年朝野新聞社を買収し、その社長に就任する。同年行われた第1回衆議院選挙に立候補して当選するも、1892(明治25)年の第2回衆議院選挙には落選した。その翌年に30歳で夭逝する。

2) 渡邊治の著作 渡邊は時事新報において記者を務

めているが、記者時代において渡邊が書いたとされる新聞記事は福沢に同行した旅行記が知られている。また、渡邊の主要な著作としては、『政法哲学』(1884)『政海之情波』(1886～87)『欧州戦国策』(1887)『鉄血政略 ビスマルク伝』(1887～1888)『警世私言』(1890)等がある。それぞれの著作の概要を見ていくと、『政法哲学』は、ハーバート・スペンサーの「社会学原理」の一部を福沢諭吉の指示の下、浜野定四郎と二人で訳出したものであり、直接的な思想を見ることは難しい。『欧州戦国策』はヴィクトル・ド・ラブレーの著作を訳したものである。『鉄血政略 ビスマルク伝』は歴史学に関する翻訳書が少なく、特に近年を取り扱ったものが少ないという問題意識の下いくつかの翻訳を組み合わせる形で編集されたものである。このように渡邊は短い人生の中で政治にかかわる著作を翻訳することが多かったことが分る。

このような主著を見ていくと、直接全てを渡邊が書いたとされるものは『警世私言』のみであると考えられる。この『警世私言』は渡邊の「所見ノ大意」を示したものであるが、その内容は政治家としての心構えなどを解き、また先述の翻訳から得られた知見を紹介するものである。そこには、本報告で取り上げる「教育」あるいは「通俗教育」の記述を見ることができない。ただし、ここから明確になることは、略歴からも分かるように、渡邊が「政治家」として生きることに對して情熱を抱えていたことであろう。

### 3. 『政海之情波』について

#### (1) 『政海之情波』の概要

『政海之情波』の原著となる“Endymion”は、ロバート・ブレイク卿によれば、“Endymion”の「大きな部分、少なくともその5分の1程度を首相在職中に書いている。しかも、その大部分は1878年の夏から秋にかけての間に、残りは1880年の夏に書き上げた」<sup>17</sup>としている。また、鶴見祐輔は「1874年組閣の時までに、約半分書いて

あつたのである。閑地に就くと彼はヒューエンデンの山荘で、せつせと筆を走らせた。そして八月には全部脱稿してしまつた」<sup>18</sup>と指摘し、やはり首相在任時までに大半が作成されたと指摘している。この著は、「著述の収入としては、当時の新記録」<sup>19</sup>といわれるほどの売れ行きを示したともいわれており、当時の英国においても広く読まれたと考えられる。

ブレイク卿によれば、「ディズレイリは人物想像力に欠けて」おり、「自分の知っている者を小説に登場させ」<sup>20</sup>ており、“Endymion”においてもその傾向が見られる。渡邊もその傾向を見出しており、それゆえ本書を『三英双美政海之情波』と名づけたといってもよい。渡邊は、自序において「主人公のエンヂミオンを伯自身に倣り、フロスタン親王を仏朗西の三世掌勅翁にフエロル公を日耳義の俾斯馬克に擬し、この外に欧州第一の佳人と謂はれたる掌勅翁帝の妃ユーゼコー皇后と才艶無双の聞こえ高かりしビーコンフィールド伯爵夫人とを写してその艶状を濃ならしめ、世界の三英、五州の双美集めて此一編稗史の骨髓たること」(第1巻 5～6頁)と述べ、『三英双美政海之情波』という訳名をつけたとしている。

さて、『政海之情波』の内容であるが、これは主人公であるエンヂミオンがさまざまな女性遍歴を重ねながら、政治社会において成功を収めていく過程を描いたものである。先述したとおり、その登場人物や起こる社会的事象についてはディズレイリの生きた社会をそのまま描いている箇所もあり、自伝的な要素が強く見られるものである。

#### (2) 翻訳の意図・形態について

1) 翻訳の意図 先述のように渡邊は、その姿勢から時事新報を解雇され、年齢を詐称してまで国会議員を目指すほど政治的野心にあふれた人物であった。その渡邊が政治小説に対して大きな関心を抱くことはそれほど不思議なことではないだろう。加えて、慶応義塾などで学んだ思想的な背景もあり、シェイクスピアの翻

訳を行うなど英国における文学に対しても興味はあったと考えられる。

この本の翻訳の意図として渡邊は以下のように述べている。

「独り本書に至りては其大体の立意精神、伯自身が幼児の艱難苦辛より漸く政治海に漕き出し又官途の潮流に楫取りして浮沈去来、幾多の変故を経て初て龍城に珠玉を探り、其乙姫にはあらざれども女皇陛下の春寵を得て政海の首領と仰ふがるまで、その路筋も判然しあれば文章以外の真意蓋し粗ぼ得て窺うに足るべし。この外には三世掌勅翁が襁褓にして皇儲に定まりながら一朝の政変、帝室安きを失ひ幼児海外に潜匿して具さに艱苦を嘗め及び恢復を図りて或は囚はれ或は鼠せられ遂に其志を遂げて帝業を開きたるの雄略、若しくは俾斯馬克公が幼にして武人の教育を受け中途志を立て専ら外交の術を務めとし、普魯西皇帝を補佐して日耳曼連邦を建てるに得意の鉄血政略を以てしたる閱歴孰れもその要領を此稗史中に描写した来り、一部の小乗なるも之を読めば恰も欧州大陸の活歴史を繙くの心地して一層の快樂あること訳者信じて之を疑はざるなり」(第1巻 7-8頁)

つまり、渡邊はこの小説をディズレイリ、ナポレオン、ビスマルクの立身伝を含んだ、ヨーロッパの「活歴史」を知るための著作として捉え、翻訳出版したのである。著作を通じた啓蒙という意識を強く感じることができる。このような意図を明確にするために、主要な登場人物の元となった人物にかかわる簡単な解説を最初に行っており、ここには渡邊のそれぞれの人物に対する評価を見ることができる。

2) 翻訳の形態 『政海之情波』は翻訳の形態においても特徴的な点が見られる。「通俗教育」について述べる際に重要な点であるので、渡邊の言葉を用いながら述べておく。

渡邊は翻訳の形態にはなるべく原文に用いられた単語の意味を用いて原文を壊さないようにする「通例の翻訳書」の形態と訳者が原文を説明し、他人がその内容

を筆記する「講義録」の形態を示した上で、自分がとる方法は、どちらでもないと言明する。彼が取った方法が「シヨルト、ハンド即ち速記法」であり、渡邊が「原文の通りの意義を酌んでは平易にこれを日本語に訳す」という方法をとるとしている。これは「日常通俗の語、軽々舌頭に動て其の原文を訳述し来るが故に意味も分り易く。また原文の字句にも懸離れず、之を尋常の翻訳法もしくは講義法に比」べてよいと判断したことによる(第1巻 13-14頁)。速記者を用いた方法を行ったのは、渡邊が時事新報社において福沢の口述筆記を担当していた経験から考え付いたものであろう。また、「意義を酌んで平易に」日本語に訳すとされているが、本文の中では背景知識がないと分りにくいような言葉には渡邊の手による補足が行われている。

なお、原著と翻訳書の最も大きな相違点は、訳書では章ごとのタイトルが付与されていることである。これは章の内容を渡邊が要約したものと考えて良い。

#### 4. 『政海之情波』の検討

##### (1) 『政海之情波』に見られる「教育」

『政海之情波』に見られる「通俗教育」の検討を始める前に、まず「通俗教育」のもつ意味を明確にするために、まず『政海之情波』に見られる「教育」の用いられ方を検討する。なお、「通俗教育」にかかわって用いられる教育は後述する。

本書の中で「教育」という用語は40箇所前後用いられており、主人公の幼少期などを語る第1巻に多く事例が見られる。この「教育」という用語の大半が education を直訳したものである。これは「Education の訳語としての教育が確立するのは1878(明治11)年に求められている」とされており<sup>21</sup>、この時期に education の訳語として「教育」が選択されるのは不思議なことではない。その他の「教育」が用いられるケースとしては training の訳語として当てている場合(例：“his mathematical training”=数理の教育(第1巻 28頁)、“any

training, moral or religious”=徳義的, 或は宗旨家庭の教育 (第1巻 165頁) や culture の訳語として当てている場合 (“Her culture, according to Waldershare, was to be carried on chiefly by Conversations”=ワルダルシエヤの説にては, イモジエンの教育は, 重に談話にて仕込むを宜しとす (第1巻 256頁)) などが存在している. 加えて, 渡邊は「ミラーはその年齢も往かぬにも似ず教育柄の善きゆえか」(第1巻 118頁) というように教育に「仕込み」というルビを振っているケースもある. ちなみに, 教育柄の原文は“for Myra was impatient of tuition”であり, 直訳すれば「ミラーは学ぶことにせっかちであった」ということであり, 教育=tuition である.

以上のように渡邊は多様な関連語句を教育という言葉で一括している. training, culture という言葉は, 原義からみても education とはその意味を異にするはずであるが, 渡邊はこれらの言葉を「教育」という言葉で一括している. これは渡邊の教育観の反映であるか判然としないが, 先述したように, 「日常通俗」の言葉を選択しているとするならば, これが当時の社会における教育の言葉の使い方として定着していることを表していると考えらるべきであろう.

「教育」という言葉の用い方の傾向は上記の通りであるが, 「通俗教育」という言葉に関連して, ○○教育という言葉に注目してみたい. それは以下の2つである.

①「君にして完全なる宗旨の教育を受けたらんには」(第1巻 147頁)

②「ワルダルシエヤは折々にイモジエンを伴ひてナショナル館若しくはハンプトン宮など, その普通教育の利益となる遊場に連れ往て」(第1巻 257頁)

①は, 父親に対してオクスフォードへ息子を進学させるように説得しようという提案の中に出てくる言葉であるが, 原文では「宗旨の教育」が“Church Education”と表現されている. この場合は, 当時展開していた教会に基づく学校のことを意味していると考えられる. ②に出てくる「普通教育」は“popular education”の訳語である. 加えて, 「普通教育」の場所として「遊場」がと

りあげられている点が, 学校外の教育作用を示すものとして着目されるだろう.

(2) 『政海之情波』に見られる「通俗教育」

さて, 『政海之情波』では「通俗教育」の語は, 2箇所見ることができる. いずれも政策談義の中で展開されたものである. それぞれ検討を行う.

1) 翻訳語としての「通俗教育」 最初に現れるのは, 第20回「年少始めて官途に上り同僚の爲めに祝宴を開く」と題された祝宴における議論の以下のような描写に現れる.

「下院議院が愛蘭寺院の租税金を通俗教育の用途に資すべとの議を可決なしたるが爲めに, 保守党政府は失敗し, 内閣の更迭を致したる事件に付, 彼是議論となりけるが, 彼のジエウエツトは

実に然り. 左れども是れ独り愛蘭寺院のみに限る可らず. 全てプロテスタント (新教) 寺院の収入金をも悉皆通俗教育の資金に流用すること, 誠に良策ならん」(第1巻 218-219頁)

この一節については, 原文に対応する箇所があるので, 確認する.

The vote of the House of Commons in favour of an appropriation of the surplus revenues of the Irish Church to the purposes of secular education--a vote which had just changed the government and expelled the Tories--was much discussed. Jawett denounced it as a miserable subterfuge, but with a mildness of manner and a mincing expression, which amusingly contrasted with the violence of his principles and the strength of his language.

“The whole of the revenues of the Protestant Church should be at once appropriated to secular education, or to some other purpose of general utility,” he said. “And it must come to this.”

この2文を対照すると「通俗教育」は「secular education」の訳として当てられていることになる. 本著において, 直訳として用いられる「通俗教育」は, この部分においてのみである. かつ, 原著における「secular

education」が用いられる箇所もこの箇所のみである。このことから考えても、渡邊は「secular education」を意図的に「通俗教育」と訳していると考えることができる。

「secular education」は、「世俗的教育」とも訳されることがあるが、この語は宗教教育に対して用いられるものである。この議論が行われた時期は1834年であり、この「保守党政府の失敗」とは1828年に行われた審査法の廃止及び1829年のカトリック解放令をきっかけとして保守党内閣が倒れたことを意味している。

2) 章タイトルとしての「通俗教育」 次に現れるのが章タイトルである。『政海之情波』における章タイトルは、先述したように渡邊がつけたものであって、このタイトルは渡邊が章の内容を概括してつけたものである。章タイトルとしての「通俗教育」の用例は以下のとおりである。

「第三十一回 昆虫理学の話は遂に共産説と為り。通俗教育の話はまた寺院談に變ず」（第2巻、378頁）

このタイトルの「通俗教育」は該当章の内容を検討することで明らかになるであろう。そこで、章の内容を検討する。なお、本章の文章の中に「通俗教育」の言葉は用いられておらず、直接的に「通俗教育」の意味を明確にすることはできない。

まず、この章のタイトルから、章の内容は「昆虫理学の話はついに共産説と為り」とされる前半部分と「通俗教育の話はまた寺院談に變ず」とされる後半部の二つに分けられることが理解されよう。実際、この二つの間には時間的な差異がみられている。となると、渡邊が「通俗教育」であるとしてとらえた事象は、章の後半部分ということになる。そこで、少々長くはなるが、章の後半部分のうち、特に渡邊が「通俗教育」と捉えたであろう箇所について引用する。これは、「ニウチアテル」と「ペンルードク」の兩名の政策談義に関する記述である。

「馳走も濟み婦人衆は座敷を仕舞ひ、愛嬢アドリヤナもミラー嬢と手を取り、外面の方に歩み出れば跡に推遷りて、彼れ是れ互いの意見を吐露せし内に、ペンルードクはジョン・ラッセル侯が「寺院付属の資金を普通

教育に流用せんとの政策は以ての外の振舞なり」と批判しけるに

ニウチアテル 予の考へにては何も左程の御心配はあらぬ筈なり。それを如何にと申すならば、今の世は自由主義の世の中なるに、御身一人が此主義に反対して彼れ喋々せらるゝは、取りも直さず世の逆流に沿ふ者ならずや。且つ国民に普通教育を布くの一事は何よりも必要なる事柄にては非ざるか。然して、此教育に対するの入費は何れの処より支出す可き者なりやを問はゞ言はずと知れし。吾々国民の頭上に罹る筈にてあるなり。

即ち寺院なる者も亦国民の一部分にてあることなれば、政府が寺院に教育費の負担を命ずるは豈に公平の策にてあらざるか。おん身にも御承知ならん。僕は、自由主義の人にてはあれど、決して乱暴過激の事を悦ばず。左れば主義反対なる保守党の首領ロベルト、ピール氏が先頃の総選挙に多数を得たる事ありしも予はあへて心配に思はず。却つて両政党が均一の勢力を占めしこそ願はしとなしたるなれ。予の諸朋友は自由主義の人々にて当時何れも政府には立てども、さして見栄えある仕事をも為さざるは予もこれを笑ひ居るなり

と言ひつゝ……」（第2巻 384—385）

この引用箇所には1点留意が必要である。それは「ペンルードク」が述べた言葉の「寺院付属の資金を普通教育に流用せんとの政策は以ての外の振舞なり」部分は、原文には直接記されていない一文であり、渡邊がその文意から挿入したものである。なお、原文では以下のとおりである。

“His reverend guest could not conceal his alarm about the position of the Church and spoke of Lord John Russell's appropriation clause with well-bred horror.”

ここでは取りあえず「普通教育」の費用の支出の問題が「通俗教育」に関する事例として挙げられていることを確認しておきたい。

2) 「通俗教育」がさす事象 ディズレイリの“Endymion”は、「偶発的な自伝的小説」とされており、



小説の中で起こっている出来事は、当時の英国社会において起こっていたことと密接にかかわっている。特に、ジョン・ラッセルのように実名を出しているのであれば、それは歴史的事象を取り上げていると考えなければならない。そこで、この2つの「通俗教育」(secular education 及び education) が使われた背景事情を確認しておきたい。

この二つの言葉を考える上で重要になるのが、引用箇所に出てくる二つの言葉、「愛蘭寺院」と「ジョン・ラッセル」である。

まずジョン・ラッセル(1792~78)は、ホイッグ党及び自由党で庶民議員を長きにわたり務め、1846年~1852年及び1865年~1866年の二度にわたり首相を務めた人物である。1846年~1852年の首相在任期間には、自由貿易を主張して保守派を離れていたピール派と連立しながら政権を運営したが、工場法の1847年改正や1848年公衆衛生法の制定などを行っている。1852年には、ディズレイリの保守党との政策論争に破れ、内閣総辞職を行っている。1852年に首相を辞した後は、労働者に選挙権を与えるための選挙法改正に向けて動くなど、活発に活動した。この選挙法の改正はディズレイリのもとで達成されることとなる。1865年には前任の首相パーマストンが死去したことに伴い、首相に返り咲くが、選挙法改正をめぐる党内の分裂を避けるために、内閣総辞職を行ったため、短命の内閣に終わった。1867年に党首の職をグラッドストーンに譲ると、その後は在野で文筆業に専念した。

さて、ここで注目したいのが、“Lord”の称号である。ラッセルは、1861年に叙爵しており、それ以降は“Earl”の称号を用いることとなる。それゆえ、ディズレイリがその点を配慮して、この“Lord”を用いたとするならば、この発言の内容はラッセルが“Lord”と呼ばれていた、議員に当選した1813年~1861年までの事象を示していると考えるのが妥当である。

次に「愛蘭寺院」である。これは、アイルランドにおける教会組織を指す。ここに書かれていることを理解

するためには、1830年代前後のアイルランドの事情を見ておく必要がある。アイルランドは1800年に制定された「連合法」に基づき、1801年にイングランドに併合された。連合法は反対意見もあったが、わいろなどの影響もあり、成立した。その際にカトリック教徒を差別する「カトリック処罰法」及びイギリス国教会教徒以外が公職に就くことを制限する「審査法」の廃止を含めた「カトリック教徒の解放」が約束されたが、当時の国王ジョージ3世の反対もあり、「カトリック教徒の解放」は遅々として進まなかった。そのような状況に対して、アイルランドの民衆はよしとせず、合併反対運動を行うことになる。その中心的人物がダニエル・オコンネルであった。1805年には1760年に設立され、権利の拡充をもって解散していた「カトリック委員会」が再興され、オコンネルは1807年にその委員となる。「カトリック委員会」は、拒否権の取り扱いを巡り内部で対立がおこるが、その対立の過程の中で、拒否権の否定を強く主張したオコンネルは存在感を高めることとなる。オコンネルは「カトリック委員会」を解散したうえで、「カトリック会議」を結成するが1814年にイギリス政府の弾圧もあり解散する。

このような活動がアイルランドで起こっているにも関わらずカトリック教徒の解放はイギリス議会の貴族院の反対もあり、なかなか進まなかった。そのような状況の中で設立されたのが「カトリック協会」(1823年)である。このカトリック協会は、大衆動員を通じた政治的示威行動を展開したが、これでも事態は好転せず、オコンネルは、カトリック処罰法によって当選しても議員になることができないことはわかっていたが、イギリス議会選挙に立候補し、見事当選する。このことがジョージ4世にカトリック教徒の解放を決断させ、1829年にカトリック解放法が制定された。1829年の段階でオコンネルは、国王至上権を認めなかったため議員になることはできなかったが、1830年の総選挙で当選する。

議員となったオコンネルは、積極的な活動を展開す

るが、特に重要なのが「アイルランド党」である。『政海之情派』における「愛蘭党」とは、この「アイルランド党」をさすものと理解するのが妥当である。1832年の選挙において30名以上のアイルランド党員が当選し、イギリス議会においても無視できない存在になっていた。それは、「ニウチアテル」が「両政党が均一の勢力を占めし」と表現した状況において、特にホイッグ党にとって重要な存在となる。このような状況の中登場してくるのが、先述したジョン・ラッセルである。

ジョン・ラッセルは、アイルランド党と連携を深めるためリッチフィールド卿の自宅にオコンネルを招き、ある政治的取り決めを交わす。それが「リッチフィールド邸の盟約」である。そこには「10分の1税として集められたお金の大部分を貧困層（大半がカトリック教徒）の教育費に充当する」とする取り決めが含まれていたとされる<sup>22</sup>。10分の1税とは教区民から収穫物10分の1を徴税するもので、教会の収入となったものである。

このような背景をみていくと、「通俗教育」が用いられた場面における議論がより明確になってくるだろう。つまり、一つ目の登場場面で述べられていることは、『政海之情派』においては下院の議決としてあらわれてくるが、アイルランドの教会が集めた10分の1税を普通教育に転用することの是非を巡る議論であり、ペンルードクが強く批判したのもこの点であったと考えられる。

また、ニウチアテルが述べていた「国民に普通教育を布く」という議論は、1830年代の議論を扱っているとすれば、1833年に制定された初等教育に対して国が補助金を交付するという制度の成立を取り扱っていると考えられる。これは、民衆教育に対する国家の関与の開始ともされ、イギリスの公教育制度の開始ととらえられることもある。

以上を整理すると、『政海之情派』における「通俗教育」は原著である“Endymion”におけるアイルランド政策と公教育制度の確立過程を取り込んだ政治的な議論を翻訳する際に、「secular education」の訳語として用い

られたものであり、いわゆる「世俗的教育」を指すものとして用いられたことが理解できる。

### (3) secular を通俗と訳すことの妥当性

1) 英和辞書に見られる secular の訳語 ところで、これまで見てきたように渡邊は『政海之情波』において、secular education を「通俗教育」と翻訳し、教会による教育に対する世俗的な教育を「通俗教育」という言葉で表してきたことが明らかになったが、この用法は当時の翻訳の在り方から見たとき、一般的なものであったのだろうか。あるいは、特別なものであったのだろうか。ここで secular education の secular は、当時いかに訳されていたのかを、当時出版されていた英和辞典の事例を元に確認しておく。

まず、蔵田屋清右衛門の手による、『英和对訳袖珍辞書』<sup>23</sup>では、secular の単語の訳として「世俗ノ」という言葉が当てられている。また、柴田昌吉、子安峻編『英和字彙：附音插図』<sup>24</sup>においても同様に「世俗ノ」という訳語が当てられ、加えて「世ノ」「世界ノ」等の語が当てられている。加えて、渡邊が『政海之情波』を翻訳する前後に出された辞書である島田豊纂訳、曲直瀬愛校訂『和訳英字彙 附音插図』<sup>25</sup>及びイーストレーキ、棚橋一郎訳『ウェブスター氏新刊大辞書と和訳字彙』<sup>26</sup>では「世俗ノ」という上述のもの以外に、「寺法ニ束縛サレザル」という訳がそれぞれ掲載されている。つまり、当時から secular を宗教的なものから区別する意味で世俗と訳すことは一般的であったことが示される。しかし、今回確認した当時の英和辞書においては secular を「通俗」と訳した辞書を見出すことはできない。

2) 渡邊による secular の訳し方 では、渡邊自身が secular を他の訳書においてどのように翻訳していたのであろうか。渡邊が翻訳書を多数出版していたことは、上述したとおりであるが、原著に当たる文献において secular という単語を用いていたのは、スペンサーの著作を訳した『政法哲学』<sup>27</sup>のみである。この政法哲学は、スペンサーの社会学原論の“political institute”を翻訳したものであるが、この中で secular という単語が用いら

れている箇所は10箇所見られる。その中で対訳が判別できるケースを検討すると以下ようになる<sup>28</sup>。

①along with this sacred ruler there coexists a secular ruler. (359頁)：「現他両界ノ司」(前編 245頁)

②judges in secular matters as well as in sacred matters (500頁)：「世俗ノ事」(後編 79頁)

③But in subsequent periods ecclesiastical tribunals, bringing under canon law numerous ordinary transgressions, usurped more and more the duties of secular judges. (502頁)：「俗ノ判官ノ職掌」(後編 82頁)

④And here we are at once shown how it happens that throughout early stages of social evolution, no distinction is made between sacred law and secular law. (518頁)：「世俗上の命令」(後編 110頁)

⑤we have first to note that a differentiation takes place between those regarded as sacred and those recognized as secular. (525頁)：「俗世ノ法」(後編123頁)

⑥Though, during the primitive period, the head of the State, at once king and high priest, and in his latter capacity dressed as a god, was thus the mouth-piece of both sacred law and secular law (526頁)：「世法」(後編 124頁)

⑦Along with that mingling of structures shown in the ecclesiasticism of kings and the secularity of prelates, (527頁)：「現世ノ事」(後編 126頁)

⑧But subsequent evolution brought about stages in which various transgressions, held to be committed against both sacred and secular law, were simultaneously expiated by religious penance and civil punishment (同上)：「世法」(後編 126頁)

すなわち、ここから渡邊は翻訳において「世俗」「俗世」といった言葉を用いているものの、「通俗」という言葉を当てているケースは存在しないこととなる。つまり、secularを「通俗」と訳すことは渡邊にとっても特別な事態であったことが示される。

3) 字典に見られる「通俗」最後に、「通俗」の意味を確認する。ここでも字典との対比を行いたい、今

回は、若干時期は下るが、『言海』(1906年)で確認してみたい、それによれば、「通俗」の意味は「高尚ナラズシテ世俗ニ通ズルコト」とされている。つまり、「通俗」という言葉そのものには宗教に対するものとしての世俗という意味は含まれていない。ただし、「通俗」の意味の範疇に、「世俗に通じる」という意味が含まれていることから、「通俗」がsecularの指す「世俗」の意味が重なり合い、結果としてsecular educationを通俗教育と訳すことも可能となったと推測できる。

## 5. 渡邊の「通俗教育」の持つ意味

以上、『政海之情波』における「通俗教育」の意味を検討してきたが、それは従来取り上げられてきた「通俗教育」の用例とどのように異なるのであろうか。本章では、従来研究のなかで触れられてきた「通俗教育」の用例を取り上げ、それらとの比較で渡邊の「通俗教育」の持つ独自性を考察する。

今までの研究の中で最初期の通俗教育として取り上げられるのが、1885年の庵地保『通俗教育論』である<sup>29</sup>。庵地は、その著作の執筆目的を「俗談平語を旨とし以て民間の父兄に便にす」<sup>30</sup>とのべているように、通俗教育を簡単な教育論という意味でとらえている。次に著名な「通俗教育」の用例としては杉浦重剛の例が挙げられることが多い。杉浦は明治18年から21年の間に積極的に通俗教育論を展開するが、「加藤弘之君の徳育論」<sup>31</sup>において以下のように述べる。すなわち、「導師は予て通俗教育の力頗る盛んにして、従来<sup>の</sup>所にては到底学校教育を圧倒するの傾きなきにしもあらずと信ずる者なり。此通俗教育と称すべき範囲内には演戯<sup>しほい</sup>、軍談、講釈、浄瑠璃、俚歌、新聞、雑誌、角力、玩具等ありて、是等は夫の学校に於ける御儀式通りの徳育杯とは違ひ、面白半分にて見聞する所なれば人の精神に浸潤すること極めて深く、随つて若し有益とせんかその益たる尤も大なれども、若し有害とせんか其害とせんか其害も亦随つて大なるべきは理当に然るべき所なり」<sup>32</sup>と。杉浦

は、学校教育の道德教育と対比する形で、「通俗教育」による道德教育について述べているが、この場合の「通俗教育」は学校教育以外の人間形成作用を指している。

一方で、通俗教育という言葉は、実際の活動の名称として使用されることが多かったことも知られている。例えば、『福島県私立教育会雑誌』には「教員諸氏ニモ亦此通俗教育会ニ御尽力アランコトヲ希望致シマス」<sup>33</sup>とあり、「教育ノ理ヲ説カ子バナリマセン」<sup>34</sup>とあり、教育の普及のための教育活動として位置付けられている。また、千葉県印旛郡における通俗教育談会の事例も「教育上必須なる事項を平易解説する」<sup>35</sup>事業として位置付けられている。また、1887年には『通俗教育新聞』が、「最も通俗平易の文章を以て最も面白き事実を記載せらるゝ趣向」で鶴橋国太郎により発刊されている<sup>36</sup>。また、図書館に「通俗教育」という言葉が用いられ、「通俗教育書籍館」という施設も展開されている事知事ができる<sup>37</sup>。このように、実践としての通俗教育の使用例は非常に多い。その内容などに関しては、非常に多様であり、一概には言えないが、共通して言える事は、幻灯機の使用や平易な文での表記など、方法の平易さである。

このように当時用いられていた「通俗教育」とは、教育を平易な言葉、世間で一般的に使われている言葉で説明することであり、学校教育的な方法ではない、平易な方法による教育を指すものとして用いられていた。これらは、渡邊の「通俗教育」とは、大きく異なるものである。一般的に用いられた「通俗教育」は「学校教育」に対応するものであったのに対して、渡邊の「通俗教育」は、宗教的な教育に対応するものであったからであ

る。

## 6. 終わりに

以上、『政海之情派』における「通俗教育」の用いられ方について述べてきた。渡邊がこの著作で示した「通俗教育」は宗教教育とは異なる「世俗的教育」あるいは「普通教育」を示したもので、これは教会が絡むアイルランド政策及びイギリスにおける公教育制度の確立過程を背景にした文章においてあらわれたものであり、今まで検討されてきた「通俗教育」のとらえ方は異なるものであることが示された。渡邊の「通俗教育」の用い方は、その当時の状況からみて、特殊な事例であったと考えられる。

最後に、本論を閉じるにあたり、今後の課題について述べる。それは、渡邊が用いたような「通俗教育」の用い方はどの程度広がっていくのか、あるいは行かないのかを検討することである。今まで取り上げられてきた事例の再検討も含め、公教育制度の展開過程を論じた史料などから明らかにすることが可能であるかもしれない。とくに、今回のような教育の世俗性をめぐる議論の中に、同様な「通俗教育」の用例が含まれている可能性もあるだろう。

今回取り上げた渡邊の「通俗教育」の用例は、確かに従来の通俗教育理解の根底を覆すほどのインパクトはないかもしれない。それでも、従来全く検討されてこなかった、この一例が新たな「通俗教育」の研究の礎となれば幸いである。

<註>

なお、本論執筆にあたり、旧漢字は新漢字に改めた。

1 松田武雄『近代日本社会教育の成立』九州大学出版会 2004年

2 佐藤三三「社会教育は、なぜ「社会教育」と命名されたのか（その1）—明治10年代の社会教育論研究の検討—

- 通して一』『弘前大学教育学部紀要』第101号 2009年 129～138頁
- 3 俾君斯裨徳伯著, 渡邊治訳『三英雙美 政海之情波』第1巻～第4巻 丸善書店 1886
  - 4 本論執筆にあたり, プロジェクト・グーテンベルクによって電子化されたものを用いた。  
(<http://www.gutenberg.org/files/7926/7926-h/7926-h.htm>)
  - 5 Lord Robert Blake “DISRAELI” ロバート・ブレイク卿, 灘尾広吉監修, 谷福丸訳『ディズレイリ』大蔵省印刷局, 1993年や鶴見祐輔『英雄天才史伝 ゼズレリー』, 太平洋出版, 1951年が著名である。なお, 本論におけるディズレイリの経歴等はブレイク卿の著作を参照した。
  - 6 村岡健次『ヴィクトリア時代の政治と社会』ミネルヴァ書房, 1995等参照
  - 7 当時は匿名で出版された。なお, 後年この著作についてディズレイリは「若気の至りであった」として, 1853年に出版された著作集に掲載することさえも拒んだとされている。
  - 8 小日向定次郎『近世英文学史』文献書院 1929年 420頁
  - 9 久米邦武編 田中彰校注『特命全権大使 米欧回覧実記 (二)』岩波書店 1978 90頁
  - 10 サミュエル・スマイルズ 中村正直訳『西国立志編』p. 94-95頁。なお, 引用した箇所原著における表記は以下のとおりである。“Mr. Disraeli affords a similar instance of the power of industry and application in working out an eminent public career.”中村は「勉強学習」と表現しているが, 対照すると“industry and application”となる。
  - 11 杉原一郎編『近代日本とイギリス思想』日本経済評論社 1995年 107-115頁 115頁
  - 12 坂井達郎「渡邊治 (台水)」福沢諭吉事典編集委員会編『福沢諭吉事典』慶応義塾大学出版会 2010 607-608頁
  - 13 都倉武之は, 慶応義塾大学出版会のウェブ上で, 「時事新報史」を連載しており, その過程で渡邊治にも触れている。( <http://www.keio-up.co.jp/kup/webonly/ko/jijisinpou/html> )
  - 14 山名次郎『偉人秘話』実業之日本社 1937 104-105頁
  - 15 福沢諭吉, 慶応義塾『福沢諭吉全集』第18巻 岩波書店 1971 251～252頁
  - 16 同上書 272-273頁
  - 17 Lord Robert Blake “DISRAELI” ロバート・ブレイク卿, 灘尾広吉監修, 谷福丸訳『ディズレイリ』大蔵省印刷局 1993年 851頁。
  - 18 鶴見祐輔『英雄天才史伝 ゼズレリー』太平洋出版 1951 514-515頁
  - 19 同上 515頁
  - 20 ブレイク卿 前掲書 855頁
  - 21 森川輝紀「立身出世主義と近代教育」辻本雅史・沖田行司編『教育社会史』山川出版 2002 275頁
  - 22 オコンネルの経歴については, 村上智章「ダニエル・オコンネル小伝」『広島国際大学医療福祉学科紀要』第7巻 2011年 83-105頁を参照した。
  - 23 蔵田屋清右衛門『英和对訳袖珍辞書』1869年 362丁
  - 24 柴田昌吉, 子安峻編『英和字彙 附音挿図』日就社, 1873
  - 25 島田豊纂訳, 曲直瀬愛校訂『和訳英字彙 附音挿図』大倉書店, 1888, 735頁
  - 26 イーストレーキ, 棚橋一郎訳『ウェブスター氏新刊大辞書和訳字彙』, 三省堂, 1888 976頁
  - 27 浜野定四郎, 渡邊治訳『政法哲学』, 時事新報社, 1885

- 28 原著については HERBERT SPENCER “THE PRINCIPLES OF SOCIOLOGY” D. APPLETON AND COMPANY, 1900を参照. それぞれの該当する頁番号を括弧に示している. また、『政法哲学』については, 前篇・後編の別と頁番号を同様に括弧で示す.
- 29 庵地保『通俗教育論』, 金港堂, 1885
- 30 庵地前掲書 3頁
- 31 杉浦重剛「加藤弘之君の徳育論」『全集』第1巻 140-149頁
- 32 同上 149頁
- 33 「教育者の將に為すべき事業」『教育時論』第49号 開発社 1886 4頁. また, 若干後になるが, 地方における通俗教育会の事例がある（「遠足と通俗教育会」『教育時論』第87号 開発社 1887 25頁）.
- 34 同上
- 35 「通俗教育談会」『教育報知』第57号 東京教育社 1887 16頁
- 36 「通俗教育新聞」『教育報知』第71号 東京教育社 1887 17頁. なお, この『通俗教育新聞』は第60号を向かえた時に『普通教育新聞』と改められたようである. 内容が「通俗教育的」なものから「普通教育的」なものへと変化していったのか, それともまわりの状況がそうさせたのかは不明である.
- 37 滋賀県に設けられた「凡ねく通俗し易き書籍を蒐集し, 教育の普及を図るを以て, 目的」とする江東通俗教育書籍館の例が『教育時論』に見える（「湖東通俗書籍館」『教育時論』第105号 開発社 1888 30頁）.